



as human, for human

PARAMOUNT BED

# Paramount Medical Report

vol. 2

床ずれと向き合う皆様に

## 特集 1

OH スケール開発と

在宅における褥瘡予防を考える

～ 統合医療 希望クリニック 堀田先生インタビュー～

## 特集 2

USER INTERVIEW

むらた日帰り外科手術・WOC クリニック

統括看護部長・皮膚・排泄ケア認定看護師

熊谷 英子様



むらた日帰り外科手術・  
WOCクリニック  
統括看護部長・  
皮膚・排泄ケア認定看護師  
(前 東北大学病院 看護師長)  
熊谷 英子 様

## 東日本大震災における活動と新たな取り組み

東日本大震災発生から3年が経過しました。しかしながら、いまだ、約26万4千人(復興庁調べ)が避難生活を送っている現状にあります。

東北大学病院は、1308床(震災発生時)を有する特定機能病院であり、東北地区の地域医療を担う拠点病院です。震災当時WOCセンターには、2名の皮膚・排泄ケア認定看護師(以下WOCN)が勤務していました。拠点病院のWOCNとして、被災した皮膚・排泄ケア領域の患者の受け入れ、被災地の医療者・WOCNの支援を行って来ました。今回の震災では、道路の分断、ガソリン不足、停電などのライフラインの遮断が支援を困難にしました。特に沿岸部とは、固定電話、携帯電話が全く使えない状況が続きました。インターネット復旧後、関連団体のHPを通し気仙沼市で活動中のボランティア団体から「避難所に敷くマットレスを早急にほしい」との依頼を受けました。避難所の冷たい床に横たわる被災者が目に浮かび、すぐに各関連業者に依頼の電話をしました。しかし、多くの業者が「震災時の関連学会の支援体制が整備されていないため、単独での活動はできない」という返答でした。そのような中、パラマウントベッド社の仙台支店担当者より「すぐに対応できます。」という心強い返答をいただきました。パラマウントベッド社では、震災直後の3月17日より宮城県、福島県、岩手県の病院・施設・避難所にマットレスの供給を開始していました。この迅速な対応にはもちろん、道路が分断された中のマットレス搬送の困難さを考えると思わず涙がこぼれました。早速、依頼された気仙沼市の避難所にも100枚のマットレスが供給されたほか、3月末までに折り畳みベッド392台、ギャッチベッド90台、マットレス497枚が近隣3県に供給されました。この迅速な対応に多くの被災者が心身ともに救われたに違いありません。また、3月下旬からは、関連学会よりマットレスはじめ多くの支援物資をいただきました。支援物資は、宮城県内の関係者に分配し、ひとつの無駄もなく被災された皆様に活用させていただきました。皆様の暖かいご支援に心より感謝と御礼を申し上げます。

震災発生～4月22日までに沿岸部よりヘリコプター・救急車で東北大学病院に搬送された患者は215名であり、内28名が褥瘡保有者でした。褥瘡発生要因として、肺炎、敗血症などによる全身状態の悪化、避難所生活による栄養状態の低下、生活不活

病(廃用症候群)等があげられ、その多くが体圧分散寝具未使用者でした。

今回の震災では、避難所における褥瘡予防対策を含めた災害対策の構築が大きな課題として残りました。

2014年2月、皮膚・排泄ケア領域の災害対策として、宮城県におけるストーマケアの災害対策フローを構築しました。関連団体代表者による災害対策委員会、県内のWOCNによるワーキンググループを立ち上げ、連絡ルート、物品搬送ルート、災害発生時の具体的支援体制、汎用装具の使用、平常時の患者指導等を含めた災害対策マニュアルを完成させました。この5月からは県内関係者と3400名のストーマ保有者に患者用マニュアルを配布し、災害対策の内容を周知させる予定です。今後は、関連団体の協力を得ながら褥瘡、スキンケア関連の災害対策フローを構築することが急務と考えています。

最後に、私ごとではありますが、長年勤務しました東北大学病院を3月末で退職し、4月1日よりWOC専門のクリニックで、WOC外来、在宅褥瘡管理者として訪問看護に携わりつつ、沿岸部での支援を開始しました。東北大学病院時代に習得した知識・技術、そして、チーム医療を生かし、地域の皮膚・排泄ケアの発展に貢献して行きたいと考えています。

“いつでも どこでも 素敵なあなたの笑顔を見たいから” 今後とも皆様からの変わらぬご支援をどうぞよろしくお願い致します。



▲ 地域訪問看護ステーションでの研修会  
(仙台市 ころサポート太白訪問看護ステーション)